

「WOMAN」

戸田誠二 著 宙出版 700円

主に女性をテーマとした短編漫画集です。戸田作品はさりげない日常生活に潜む問題や転機が描かれ、いつも意外な気づきをくれます。

面白かったのは、父親が突然失業し当座のアルバイトとして「1ヶ月の間 1900年代の生活をする」・・・というモニターを始めた家族のお話。文明の利器も派手な娯楽もない中、手間のかかる家事に振り回される日々。ただ生活をする、それだけであつという間に時間が過ぎる。余計なことを考える暇もない。そんな日々後に家族それぞれは何を思ったか。

悲しい話でもどこかに希望が残る。登場人物が皆誠実に生きている。ちょっとだけ心が浄化された気分になれる一冊です。(森)

☆☆☆星くずのつばやき 其の12 ☆☆☆

—— 「のぞみの園」の研修会に参加しました ——  
(国立重度知的障害者総合施設)

常々疑問に思っていたこと(=息子たち知的障害者の老化)や不安の種(=重い病気に罹った時)がある程度解消しました。9月6日、のぞみの園での研修会に参加し、講演を拝聴したからです。

講演テーマ「高齢化について」

私たちの子どもは、一般と比べ、10才~20才早く老化するリスクがあると考えられるとのこと。身体・認知・免疫機能が落ち、認知症も発症することがあるようです。もともと低い認知機能が更に低下し、運動機能も落ちやすく生活習慣病も早い時期から罹りやすい等、社会生活・日常生活でいろいろな問題が生じる可能性が高い・・・。早期に異変に気付くためには、本人の性格、趣味・嗜好・得意なこと、血圧・体温・体重計測、食事・睡眠・排泄の状態の把握や、気になること、ちょっとした変化を記録すること。また職員間、親との報告・連絡・相談=コミュニケーションをとること。そして、生活習慣病の予防としては、適度な運動(散歩重要)や定期的な健康診断(本人が痛さ等口頭で言えない)が大切だということです。

今回は施設内の完全予約制で外来にも対応してくれる診療所について、つばやかせていただこうと思っています。

## 編集後記

“小さなお祭り”の“こまつり”は今年もほっこり、アットホームな雰囲気で開催されました。毎日少しずつ準備して仕上げた手作りのお祭りでした。来年はどんな“こまつり”を作り上げようか・・・。「来年の事を言うと鬼が笑う!？」いえいえ、今や時代は前倒し!!もうすぐ、街はクリスマス一色となり、平成も終わりの足音が近づいてきます・・・が、焦らずコツコツやっっていこうと思います。

I・N

# 銀河通信

NPO法人 北斗七星  
〒376-0006 桐生市新宿3-3-19  
(桐生市総合福祉センター内)  
Tel 43-6151 Fax 46-9504

## 10月13日(土) 年に一度の大?!イベント

# こまつり を行いました



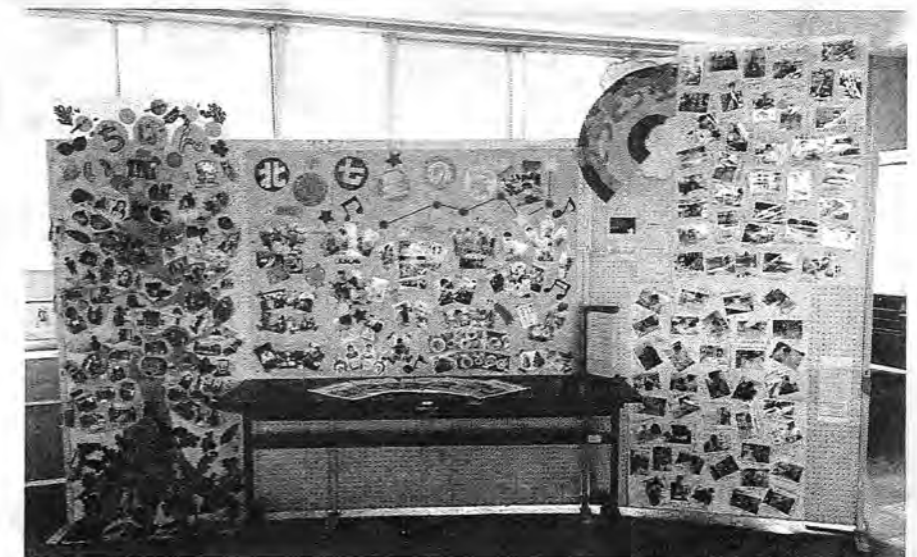
活動中に遊んでいる手作りゲーム等々取り揃え

匂いで人寄せ?!ばかりに

おやつ用のマシンを利用したのポップコーン 等、

皆さんにも おいしく! 楽しく! 過ごしていただきました

(2, 3ページにこまつりの様子を紹介)



活動の様子のパネルは、翌日の“ふれあいフェスティバル”にも展示しました。

# 北斗七星 “こまつり” フォトギャラリー

ガラポン



こまつり



今回は、景品にお菓子だけではなく、ティッシュや洗剤を入れてみました。すると、K君はお菓子を選んだものの、戻ってきて“ママのために!!”と洗剤に取り替えていました。

いちばん星の部屋に現われた自動販売機!! 今回はジュースを販売しました。カードを選んで入れ、コインを入れると、ゴトンとジュースが出てきました。あら不思議!! どんな仕掛けになっているのか皆さん興味津津でした。

## 手づくり 自動販売機



どしなってるのかあ?

## らくがきせんべい

らくがきせんべいは、今回グラニュー糖とお好み焼き風の2種類のトッピングを用意しました。特にグラニュー糖は天然色素で色付けを行い、体にやさしい物を提供する事ができました。色合いもパステルカラーのピンク・水色・グリーンとても女の子に人気がありました。お好み焼き風は、ソース・鰹節のいい香りが食欲を誘っていました。



## ポップコーン

実際にポンポンはじける様子を見てもらいたい、来場者の皆様にいい香りを届けたい!! と思いい作り置き量を少なくしました。



塩あじ 色カレー味



休憩スペース

## ずぼんぼ



皆さん「ずぼんぼって何?」と興味を持って下さっていたので、ここで説明  
 Q. ずぼんぼとは?  
 A. 浅草観音の境内で売られていた江戸玩具のひとつ。彩色した和紙を折りたんで、獅子が舞う様子を表す。うちわであおぐと、胴の下に風が入り、ふわふわと宙を舞いながら面白い動きをする玩具。元々は、獅子舞を仰いで動きを楽しむ玩具ですが、活動の中で遊んでみると、なんと難しかったのです。なので、机上に3レーン作ってずぼんぼを並べ、うちわであおいで競争するというアレンジをしてみました。競争と言う事で子どもも保護者も熱中している様子でしたが、楽しんでいただけましたでしょうか?

北斗七星の家では、チョコバナナコーナーと、その他に梅ジュース&特製クッキーの販売をしました!! チョコバナナはカップにバナナ丸ごと1本!! 贅沢に仕上げました。特製クッキーは安定のおいしさ!! リピーターの方も多く、見事完売!!

## チョコバナナ&販売コーナー



カップ梅は当初は販売予定ではなかったのですが、ふと味見をした指導員が『コレを売らないのはもったいない!!』と... 販売の仲間入りをしました。梅ジュースでは梅液：水分：氷の割合を決めるにあたり、指導員と北斗七星の皆さんで何度も... 何杯も... おいしい味見をしてピタリの割合を決定!! 『おいしい~』と言って飲んでくれていたお子さんの笑顔にほっこりさせてもらいました。



## 北斗七星

地味につき 写真がし トラホ...

《看板》  
 今年の看板は前回の反省を踏まえつつ、“雨・風に強い!そして軽い!”を目標に、網に金・銀・黒の各フィルムを結びつけて文字にする看板を作りました。網は頑丈なバッキングネットを使用。フィルムを結ぶ位置に目印のテープを貼り、1回2回と固結び。ピカピカ輝く“北斗七星・こまつり”の文字が出来上がりました。  
 ちょっと地味でした...

《北斗七星の家》  
 とても早くから構想を練り、準備を始めました。ひしゃく星の赤は、綿をガーゼで包み、ポンポンと叩いてもらい、その他の星は、ちぎった折り紙を貼り合わせ、タイトルを作りました。



《きらきら星》  
 用紙が白だったので、カラフルなペンでみんなの写真が映える様なコメントを記入しました。タイトルはモフモフの毛糸で水色の雲を作り、その上に七色の虹を渡しました。

《いちばん星》  
 活動中、おしゃれな“みのむし”や秋空を飛ぶ“トンボ”もコツコツと作ってもらい、みんなの元気な様子と共に『一本の木』にまとめました。



去年は小さいパソコンの画面でしたが、今年はプロジェクターで大きく上映しました。写真に加え、動画も一緒に映すことで、より皆の活動の様子が伝わったのではないのでしょうか...?

来年はもっとたくさん動画を流せたらいいなあ... と思っています。

# 障害者の自立を支援

伊東屋珈琲2号店で「ノンアート」展始まる

10/19  
10/19

## 仲間の力で商品づくり



知的障害者の創作力を生かしたもののづくりを通じ、経済的自立を支援する「あめんぼプロジェクト」(野村裕子代表)主催の「ノンアート」展が19日から、桐生市仲町三丁目の伊東屋珈琲2号店で始まった。24日まで。

4回目となる今回は「響働(きょうどう)」をサブテーマに掲げ、作家となる障害者本人とものづくりに関わる人々、支援団体らの結びつきと、活動の広がりを表した。

ダウン症のHayatoさんが描いた「だるまの絵は、布に図柄と」

伊東屋珈琲2号店で始まった4回目のノンアート展

してプリントし、がまぐちやきんちゃく袋に加工したほか、太田高等特別支援学校の協力で陶器製の小皿にもなった。

工房ふじとの協業によるキッチン雑貨、作家たちの作品をデザインとして活用し、保護者らの集まり「あめんぼサポーター」の手でレジンとプラ板でクリップマグネットにしたものなど、商品の幅が広がっている。会場の伊東屋珈琲も期間中、コラボレーション商品「ノンアートフレンド」2種類を販売する。

野村代表は「今までやってきたことを言葉にしたものが響働。作

品を見て感じ取った作り手が形にし、当事者が可能性を見いだせる。一人ではできないことが、身近な仲間の心で響いてできるようになる。これからもしっかりとやっていきたい」と話す。

時間は午前10時から午後7時まで。問い合わせは、あめんぼプロジェクト事務局(電話 43・2676)へ。

## 「こまつり」で活動紹介

NPO北斗七星

ズボンボなど遊びも

障害児者と家族の会 NPO法人北斗七星 (石原昭彦理事長)の主催する秋の「こまつり」が13日、桐生市東五丁目放課後等デイサービス事業所「いちばん星」で開かれた。



北斗七星では地域活動支援センター「北斗七星の家」や放課後等デイサービス事業所「いちばん星」の運営など、障害を持つ子どもや大人が地域でふつうに暮らしていきけるよう、支援に取り組んでいる。

秋のこまつりは、家族や地域住民どうしの交流を図り、北斗七星の活動を広く知ってもらうと、毎年開催しているイベント。

来場者はこまつりカードを首に下げ、日々の活動の様子を写真で紹介するパネルコーナーやスクリーンコーナー、スポンボと呼ばれる遊びのコーナーを回った。

スポンボとは紙でできた江戸玩具。参加者たちはうちわで風を送り、ヒツジのかたちをした玩具を競わせるゲームを楽しんだ。

スタンラリー終了者は、人が中に入った「自動販売機」でジュースを手に入れ、手

作りラッキーなどをほおぼりながら、小さなまつりを満喫した。

江戸時代の紙玩具スポンボをみんなで楽しんだ(いちばん星)



## にゅーすぽっくす

平成30年10月30日発行

NPO法人  
「北斗七星」情報箱

No.1

2018年  
秋号

そんな私が4歳の頃、通っていた幼稚園で毎週バレエの教室が開かれていた。それを窓越しにずっと眺め、「行きたい、習いたい」と親に言い続けて習わせてもらった、ということがある。思えば、それがダンスとの出会い。そこから中学では「体操部」と決め、中体連郡大会では個人総合優勝までこぎつけた(県大会はメックタメタ)。

身体を動かすことが好きで、表現が好きで、センスは無くともとにかく踊るのは性に合っていたのだ。結婚して子どもが生まれてから本格的にダンスにのめり込み、泣く子に後ろ髪引かれつつもダンス

しさを実感している。このダンス指導を始めてからいろいろな文献も読んでいるが、その中で特に心奪われたのは、知的障害児の社会福祉に人生を投じた系賀一雄氏の言葉「この子らを世の光に」。この子らに世の光を、ではなく、この子ら「を」世の光「に」だ。

以前、別の文献で読んだものに、こんなものもあった。人類が生き抜き進化していく過程で、必要なのは遺伝子のコピーではなく、突然変異の遺伝子のバグだということ。知的障害者と呼ばれる人たちは、その遺伝子のバグを自ら進んで背負った高尚な魂なんだ。そこでしみ込む系賀氏の言葉。彼らは人類の光にならねばならない。

今、縁あって県内の2施設でもダンス指導をさせていた。踊るにはいい加減ヨレヨレになった私だが、ライフワークとして続けていければ、と思う次第である。

4回にわたり駄文をお読みいただき感謝。イベントで千紫万紅を見かけた時には、ぜひお声掛けください。

日々、つれづれ  
**essay**  
エッセー

「この子らを世の光に」  
遠藤 佳世子(よきこいダンスチーム代表)



# 障害者ら「見直しを」

県が障害者への差別解消に向けて来年10月の施行を目指して作成している県条例案（原案）について、障害者らから一部内容の見直しを求める声が出ている。障害者に関する差別や虐待、ハラスメントなどのトラブルが起きた時の解決の仕組みの規定がないためだ。既に同様の条例がある他の自治体には、紛争の防止や解決に関する規定があり、この点はパブリックコメント（意見公募）でも指摘されている。【鈴木敦子】

## 県の差別解消条例案

県が制定を目指して書への理解や各障害に  
いるのは「障害を理由 応じた合理的配慮を求  
とする差別の解消の推 めるなど、啓発や教育、  
進に関する条例（仮 就労促進に重点を置い  
称）。今年3月に、 ている。一方、障害者  
県内の各障害者団体や が差別などを受けたと  
法律、労働、行政の関 感じた時の相談体制は  
係者ら28人で構成する 「窓口の設置」と「助言  
検討会を設置し、3回 などの必要な支援」の  
の会合を経て、条例案 みの。相談後の紛争解決  
の原案をまとめた。11 に向けた規定はない。  
月の県議会に条例案を 県が6、7月に実施  
上程する予定。 したパブリックコメン  
原案は、県や県民、 トでは「紛争の防止ま  
事業者などに対し、障 たは解決に関する取り

## トラブル解決への規定なく



2016年施行の障害者差別解消法を受けて  
県が作成した「心をつなぐハンドブック」

組みを確実に明記すべ  
きた」「あっせん、勸  
告、公表の手続きを明  
記すべきだ」などと相  
談体制の強化を求める  
意見が延べ4件あっ  
た。

県聴覚障害者連盟副

関東圏では、千葉県

の条例（2006年制  
定）をはじめ、茨城、栃  
木、埼玉、東京の4都県  
でも同様の条例を制定  
しているが、いずれも  
紛争解決方法として  
「知事による勧告や、  
「あっせん」「公表など  
が盛り込まれている。  
県障害政策課は「法  
務局の人権相談や労働  
局の労働委員会など既  
存の機関を活用する方  
が、時間的にも効果の  
面でも有効」と説明す  
る。しかし、堀米さん  
は「障害当事者の感情  
にどこまで寄り添った  
対応ができるのか」と  
疑問を呈する。自閉症  
の団体の関係者も「一  
番困るのは「たらい回  
し」で、障害特性を理  
解した人が継続的に関  
わってほしい」と話し  
ている。

相談体制が不十分  
障害者に関わる調査  
や研究に取り組む認定  
NPO法人「DPII」日  
本会議」の崔栄繁（さ  
い、たかのり）さんの話  
条例案は県民への啓  
発や教育を盛り込んだ  
点は評価できるが、相  
談体制に関しては不十  
分だ。「差別解消」をう  
たうのなら、紛争解決  
の仕組みを作るべき  
だ。具体的には、障害者  
や家族の気持ちを理解  
できる人が相談員を務  
め、必要に応じて調整  
し、解決できなければ  
知事にあっせんを申  
し立て、条例に従わな  
い場合は勧告・公表す  
る。この仕組みがあれば  
抑止効果にもなる。

# 外出、約半数が「週2日以下」

桐生市に暮らす障害者へのアンケート結果から、約半数の人が外出の頻度は「週2日以下」と回答し、「外出しない」人が1割いることが分かった。外出できない理由として「障害が重い」が最多で、加えて「道路や階段が不便・危険」「乗り物の利用が困難」「トイレの不安」などが挙げられた。障害が重くても外出できる環境が求められており、整備の必要性が改めて示された。

## 「道路や階段が不便・危険」「トイレ不安」

# 求められる環境整備

## 桐生市 障害者アンケート

アンケートは策定中  
の「桐生市障害者福祉  
計画・障害児福祉計  
画」に生かすため20  
16年12月22日～17年  
1月31日に実施。対象  
は市内居住の身体障  
害、療育手帳、精神福  
祉の手帳所持者およ  
び精神通院医療受給者の  
うち、無作為に抽出し  
た2000人。回答数

は919人（回収率  
45・95%）で回答者の  
9割以上が20歳を超え  
ており、未成年の回答  
は36人にとどまってい  
る。  
外出頻度について  
「毎日」と回答した人  
が29%、「週3～5日」  
が19%で、合わせて約  
半数の人が週に3日以  
上外出していると答え  
ている。一方で外出が  
週に2日以下の人も回  
答者の約半数。内訳は  
「週1～2日」が20%、

「月2～3日」が11%、  
「年に数回」が4%、「外  
出しない」が10%だっ  
た。  
外出先で困ったこと  
として、「建物の入り  
口・内部の段差・階  
段」「道路の段差、歩  
道が狭い、障害物があ  
る」「障害者用トイレ  
が少なく」「利用でき  
る駐車場が少ない」な  
ど外出先の環境にかか  
る部分が多く挙げら  
れた。また、「意思疎  
通が思うようにできな  
い」「お金の支払い、  
券売機の利用」と周囲  
の人の理解や支援が必  
要なことも示された。  
アンケート結果を踏

まえた「障害福祉計画  
案・障害児福祉計画  
案」は18、20年度まで  
の3カ年計画。障害者  
の自己決定・意思尊重  
の支援や、地域生活・  
就労支援などに対応し  
たサービス提供体制の  
整備、障害を持つ子供  
たちへの支援強化など  
を掲げている。  
同計画案は市民から  
意見を募るパブリック  
コメントをへて策定す  
る。意見募集は2月14  
日まで。計画案は市ウ  
ェブサイトで見るこ  
ができる。問い合わせ  
は福祉課障害福祉係  
（電46・1111、内  
線259）へ。



にゅうすほっくす

NO. 1

2018年  
秋号

# 障害者 eスポーツで輝く

## 伊勢崎 プロ養成所開設へ

重度の障害者がプロゲーマーを目指すための養成所が、伊勢崎市に開設される。プロゲーマーらが活躍するeスポーツは、障害者も健常者と対等に戦うことができる。すでに県内から2人の参加が決まり、世界大会でも活躍するプロコーチの指導の下、11月にも育成が始まる。目標は重度障害者によるプロチームの結成だ。



養成所を開設するのは、県内を中心に障害者の就労支援や生活介護などの施設を10か所運営している「ワンライフ」(伊勢崎市)。



①プロゲーマーの養成に使う部屋で、「障害者に生きがい」と語る榊沢さん(11日) ②プロゲーマー養成所が設けられる介護福祉施設「iba-sho」(いずれも伊勢崎市で)

eスポーツ エレクトロニックスポーツ(electronic sports)の略。コンピュータゲームやビデオゲームで、ネットやLANを介してチームや個人が対戦する競技。大会では賞金が提供され、プロ選手やチームが存在する。

町の介護福祉施設「iba-sho(いはしよ)」に、プロゲーマー養成専用の部屋を二つ用意。ゲーム用機器を備え、世界大会でも活躍するプロチーム「Unsold Staff Gaming」からコーチを派遣してもらう段取りも整えた。

養成するのは、1人で行うシューティングゲームの「FPS」や5人チームで対戦する「MOBA」、カードゲームの「オンラインカードバトル」の3部門。カードゲームは、瞬発力よりも相手の手を読む戦略性が求められるため、障害によるハンデは少ないという。

対象者は障害支援区分3以上の障害者で、養成費用は無料。遠隔地の人には養成所近くに住居も用意する。定員10人で募集を始めたところ、県内に加え、大阪府や秋田県、鹿児島県からも問い合わせがあった。

榊沢さんは「プロゲーマーになることで、スポンサー料や活動費などの収入を得られる可能性がある。人生を変えられるきっかけを障害者に提供したい」と話している。11月10日には、iba-shoでeスポーツの体験会を開く。問い合わせは同施設(0270・75・3476)へ。



ノート型パソコン



### 知的障害者のスポーツを広める五輪メダリスト

ありもり 有森 裕子 さん(51)

ひと



Special Olympics Nippon



知的障害者によるスポーツの祭典「スペシャルオリンピックス(SO)」が22日、愛知県で始まる。4年ごとの夏季全国大会だ。主催団体で、アスリート出身初の理事長に就いて10年になった。出会は大会のサポート役を頼まれた2002年。「わざわざ機会をつくる組織がないと、スポーツをやらせてもらえないのか」。

そう驚き、五輪マラソンで銀と銅の2大会連続メダリストになった自分が役に立つならと快諾した。求められた役割は活動の主眼を「福祉」から「スポーツ」に変えること。当時は参加することの意義ばかりが強調され、国際大会で獲得したメダル数も公表していなかった。がんばって出した成果は、きちんとたたえらるべきでは。内部からは反発も出たが、アスリートとして感じた疑問をぶつけ続けた。

いま力を入れているのは、知的障害がある人となない人が一緒に参加する「ユニファイドスポーツ」だ。サッカーやバスケットボールなど、これまでに13競技で実現した。競技関係者を増やせば、人材育成につながるかと期待する。

SOという名前の意味について持論がある。「『スペシャル』なのは彼らではなくて、彼らを通してたくさんのごことに気づける経験です」。この組織がなくとも、誰もが当たり前前に社会に溶け込み、スポーツに触れられる未来を思い描く。

文写真 初見翔

いっしょにがんばろう

NPO 法人

「北斗七星」情報箱

2018年 秋号

No. 2

平成18年10月30日発行

# 教育

edu@asahi.com

日曜～水曜掲載

## わが子の学び ゆっくり 確かに

### ダウン症の少女「まこさんの成長」連載に反響

10/14 朝日

「まこさん」とは「まこさんの成長」(6月10日付、20日付で掲載)では、公立中学校の特別支援学級で学ぶダウン症の少女の姿を描きました。中1のまこさんは今も、授業や部活にがんばっています。連載に寄せられた反響の中から、障害のある子どもたちの学びに関わる人たちが取材しました。

楽器のおもちゃを手に、笑顔でいった。

がはじける。東京都大田区の服部周君(7)は喜怒哀楽の表情が豊かだ。保育園を経て、この春、知的障害のある児童・生徒向けの都立矢口特別支援学校に入学した。園や学校での支えを受け、成長している。

父剛さん(48)はまこさんの記事に「日常が伝わり、成長していく過程のヒントを得ることができた」、母りえ子さん(50)は「同じ時代にいまを生きている姿に、光と勇気、希望をいただいた」と話す。

生後すぐダウン症と診断された。「命の選別はしない」と夫婦で決め、羊水検査などは受けなかった。でも、りえ子さんは病弱な周君の看護などもあり、引きこもりがちになった。

周君は2歳から保育園に入った。てんかんの発作が起き、自閉症であることもわかったが、分け隔てなく対応してくれる園だった。温かな関わりを通じ、夫婦は前向きになった。

詩作の活動をしていた剛さんはそうした日々を言葉につづ



服部周君を見つめる剛さんとりえ子さん(東京都大田区)



## 「居場所」テーマに全11回

### 東大朝日講座

朝日新聞社の寄付による東京大学の講座「知の調和」が9月、始まった。8年目を迎えた今年度のテーマは「『居場所』の未来」。学部横断型の講座で12月12日まで全11回続き、東大の教員や学外の専門家、朝日新聞記者らが講師となり、学生とともに議論を深めていく。

「つながりづくりから考える居場所づくり」(コミュニティーデザイナーの山崎亮さん)、「水と人間の居場所」(芳村圭・東大生産技術研究所准教授)、

「最期まで自分らしく生きるには～記者がみた終末期」(辻外記子・朝日新聞科学医療部次長)などが予定されている。

講座はすべて一般公開されるほか、希望する高校にインターネット同時配信をする。詳細は東大朝日講座のサイト(<https://www.u-tokyo-asahikouza.jp/>)。高校配信の問い合わせと申し込みは開田奈穂美・特任助教へメール(asa-hi-koza@he.u-tokyo.ac.jp)。(鹿島啓司)

小児科の医師は 私達の前で紙をひっくり返し 周の染色体の写真を見せた(天の賜物) いつもの夜道を歩いて 「た дайマ」とドアを開く 「おか えり」という妻に抱かれた 周がふりむきかけた笑、僕の目を見る(天使の声) 今年4月、35編を集めた「詩

## 算数塾30年「生きる力の土台」

算数を教える学習塾の「遠山真学塾」(東京都武蔵野市)は小学生から30代まで約1000人が通う。ダウン症を含めて、学習に何らかの困難がある人が大半だ。主宰の小笠毅さん(78)は記事で描かれたまこさんの姿に「これからどんな勉強をしていくかに興味を持った」と話す。30年以上前から障害のある子どもへの教育に力を注いできた。障害があると、社会で自立して

生活する力が重視されがちだが、学習も「車の両輪」と考える。算数でつまずく子どもたちに向け、「りん」三つで数字の3」という数の意味や、足し算や引き算の原理を丁寧に教える。すごろくなどを教材に使い、楽しむ工夫をする。小笠さんは「障害があると学習に時間がかかるが、好奇心を支えれば良い。学びは生きる力の土台になる」と話す。(金子元希)

集 我が家に天使がやってきた」(文治堂書店)を出した。「育ちがゆっくりという葛藤や悩みもあるが、息子を通じて、子どもはみんなが天使のような存在だと伝えたい」と話す。りえ子さんは学校から「卒業まで全力で守る」「たくさん愛情をかけて」と言われ、心強かった。参観日に落ち着いて授業を受ける様子を成長を感じ、「周だからこそ出会える人を得られる気づきがある。この子でよかった」と思っている。剛さんの夢は周君とのキャッチボールだ。

◆感想や、教育に関する情報をお寄せ下さい。edu@asahi.comまたはFAX03・3542・4855へ。

2018年  
秋号

No. 2



「障害者」という言葉に違和感を覚えるとの投稿に、様々な意見が寄せられました。新しい言葉を提示して下さる方、言い換えは必要ないとのご意見……。「考える障害者」の著者で、生まれた時から両手足が使えず、車いすで活動するホーキング青山さんに伺ってみました。

▼7月3日付掲載の投稿

「障害」に違和感 こう呼んでは？

訪問介護員 田中 恵子 (千葉県 59)

視覚障害者の方の外出をサポートするガイドヘルパーの仕事について3年目。以前は気にかけることもなかった「障害者」という言葉に違和感を覚え、今もずっと、適切な言葉を探している。

「障」「害」。意味にも響きにも愛がないように思える。多数派に便利ないように構築された

社会で、今ある五感を最大限に活用し、目的を達成していく彼ら。利便性に慣れて感覚が鈍くなつた自分に比べ、むしろ自由であると感じる。

例えば、「要支援者」という呼び方はどうだろう。彼らを「支えている」と思いきや、実は「支えられている」。そんなやさしい世の中になっていきどうな予感がしませんか？



つながり感じられる「要支援者」

中学校教員 小島 守 (山形県 58)

投稿者の意見に賛成です。学校現場でも昔、通常学級と切り離して学習を行っていた「特殊学級」が、個別の生徒の実情に合わせて学習支援を行う「特別支援学級」に変わりました。同様に「障害者」も「要支援者」に変えれば、障害のない人とのつながりが感じられ、優しい感じがします。

特に、障害のある方が自分のことを話

すときに「私は〇〇障害者です」と言うよりも、「〇〇要支援者です」と言った方が抵抗なく言えるのではないのでしょうか。またそれを聞いた人は、どこかでこの人をサポートできたらという気持ちになるのでは？

併せて、「肢体不自由者」についても「運動要支援者」に、「発達障害者」は「行動要支援者」や「学習要支援者」という呼び方にするというのはいかがでしょうか。

「支援」を共生共存社会の礎に

団体職員 小野 修司 (岐阜県 55)

バリアフリー化が進む昨今、街中でハードウェアの面でも思いも寄らないような気遣いを垣間見ることがある。一方、それに対する障害者の方々の思いはわかりかねるし、自身ができる気遣いを考える

と、極めて心もとない。ふだん接するところがない障害者の方々の思いをはかりかね、支援を躊躇したり、二の足を踏んだりしてしまつた。障害者を「差別」する

気持ちはないが、必要な支援をあれこれと思い巡らせると、なかなか行動には移せない弱さが私にはある。

幸い「ヘルプマーク」が少しずつ浸透しつつある。ヘルプ(=支援)という言葉をとrendにするためにも、「障害者」を「要支援者」と呼ぶのに何ら問題は

ない。むしろ「ヘルプマーク」と「要支援者」が連動し、健常者と障害者の間に横たわる心理的ハードルを乗り越え、共生共存社会の礎となることを願う。

障害は人格と無縁 違和感ない

無職 寺戸 淳二 (山口県 74)

私は半世紀以上「障害者」と生活していますが、違和感はありません。障害のある人は可哀想、支援しないと暮らせないのでとはどの発想なら、この言葉を問題にし嫌う感情が生まれるでしょう。

例えば、食事の時に卓上の調味料が自分のそばにあり、相手が届かない場合、誰だって取ってあげますよね。そんな感じで、いたって普通に暮らしています。

「障害」は状態であり人格とは無縁だと私は思います。「要支援者」という呼び方を提案されていますが、支援を必要としない障害者もたくさんいます。調味料を渡すように、ちょっとした手助けと理解があれば十分であり、ましてや呼び名の変更は不要ではないでしょうか。

障害者も他人を支援しています

無職 上田 智徳 (熊本県 51)

「障害者」は、単に障害(ハンディキャップ)を持つ人を示す単語だと思う。それを文字に分解して解釈するから違和感を感じるのでは。「障がい」の表記は私には自己満足に思えて好きではない。

「要支援者」？ いや、障害者でも、自分が可能なことなら人に支援をする人間はいくらでもある。勝手に決めつけられなくても困る。私は1級1種身体障害者手帳を持っているが、観光客に道を教えるなどの支援は日常的にしている。

自分自身を含め、至近の人間に障害を持つ者がいないと、感じられず、理解できないことも多い。単純に言葉の問題だけじゃないと私は思う。

障害者という単語に悪意や偏見を一切交えない考えを皆が持ち、またそうなるよう教育も行うことが必要ではないか。新しい単語を作って定着させるのと、どちらが良からうか。

にゅうすぽくす

2018年 秋号

No. 3

NPO 法人 「北斗七星」情報箱

言葉だけを変えても…

お笑い芸人のホーキング青山さん「障害者」という言葉、全く気になりません。「障がい」としたり言い換え

いながら根っこは変わっていません。障害者も健常者も「同じ人間」という視点に立てば、悪い言葉は自然に変わり、なくなるかもしれません。言葉自体問題ではなくなるでしょう。意識を変えるには、お互いの理解が

たりしても何も変わらない。言葉で変わるような、そんな生易しいものじゃなく、意識レベルの問題です。

障害者の法定雇用率を中央省庁が水増ししていた問題は象徴的でした。ダイバーシティ(多様性)だなんだと言

大事です。そのために障害者も心を開きもっと社会に出て行くべきです。趣味の世界でも、隣近所の付き合いでもいい。そして家族やヘルパーら身近にいる人たちは、社会との接点を持てるようにしてあげてほしいと思います。



懸命に「生きる」ことこそ尊い 9/3 朝

無職 鎌田 郷史 (神奈川県 67)

私の息子も若くして脳梗塞を  
発症し、10年になる。幸い、近  
くの老人介護施設でのパート勤  
務に恵まれ、生活の糧を得てい  
る。片半身まひと失語症の後遺  
症で誰かの役に立つことも困難  
だが、懸命に生きている。

息子が発症したときも、そし  
て今も、息子が社会に必要とさ  
れなくても、誰かの役に立たな  
くとも生きていてさえくれれば  
と思っている。その生きる姿に  
尊敬すべきだと感じている。  
「必要とされる」「役に立  
つ」のどちらかは人それぞれ。  
生きるからこそ、そもそも手  
チベーションと考えてもいいの  
ではないだろうか。

私たちの意識こそ配慮欠く 10/2 朝

大学生 佐藤 一つみ (千葉県 20)

「障がいはい言いにすぎない。  
負けたら、自分が弱いだけ。」  
東京都が制作したパラリンピ  
ックのポスターに載った言葉  
が、配慮に欠けると批判を受  
け、撤去されました。でも、こ  
の批判を簡単に認めてしまっ  
てよいのでしょうか。

この言葉は、何かに負けたと  
き、原因は自分の弱さで障がい  
はただの言い訳だ、と受け取れ  
ます。これを、頑張っても出来  
ないことがある障がい者に対し  
て言うのは残酷だと批判するな  
ら、それは知らないうちに、障  
がい理由で何かができないこ  
とばかりです。

発達障害を伝えて働きやすく 10/10 朝

病院事務 竹中 晃子 (熊本県 33)

私は、発達障害の一つであるア  
スペルガー症候群の当事者だ。と  
ある病院に障害者枠で雇用され  
て、7年目を迎えた。

ここは4カ所目の職場だ。過去  
3カ所の職場は、人間関係がうま  
くいかなくなったり、ミスが重な  
りたりして退職した。その後の就職  
活動では、発達障害であることを  
伝えると、面接どころか、履歴書  
さえ送らせてもらえないところも  
あった。今の仕事にたどり着くま  
で1年かかった。

私は口頭で一度に複数の指示が  
あると混乱してしまう。今の職場  
では指示を絞ってもらったり、メ  
モを添えてもらったりしている。  
自分の障害を明らかにしたほうが  
働きやすいと感じる。

発達障害の人の採用について不  
安に感じている人は多いのかもしれない。常勤職員の障害者枠があ  
っても、熊本県などのように身体  
障害のみに限っている場合もある。  
精神や知的を含め障害の特性  
やそれに応じた接し方の研修を行  
うなどして、様々な障害のある人  
を広く雇用してほしい。障害者雇  
用数の水増しのような問題を防ぐ  
ことにもつながるのではないかと



障害児 育ててくれた社長たち 10/4 朝

主婦 増田 尚子 (埼玉県 66)

官公庁の障害者雇用数の水増し  
問題は、とても残念です。  
私は中学の特別支援学級の担任  
でした。1980年代は卒業後す  
ぐに働く生徒も多く、就労先探し  
は担任の重要な仕事でした。教え  
子たちを雇用してくださったのは  
小さな企業の社長さん方です。  
障害者の雇用義務は当初、従業  
員67人以上、その後62・5人以上  
の企業にしかなかったのに、教え  
子たちを自発的に採用し、工夫を  
重ねて根気強く、温かく一人前の  
社会人に育ててくださいました。

障害ある若者は努力して 9/8 朝

保育士 西村 久美子 (山口県 44)

中央省庁が障害者の雇用数を  
水増ししていたという記事を、  
悲しく悔しい気持ちで読んでい  
る。息子が通う特別支援学校で  
は、小・中・高の12年間を通  
し、働く体験が中心の授業に取  
り組む。卒業後の自立や社会参  
加のため、学校と家庭が連携  
し、年間通じた就労相談や企業  
や福祉施設の見学会など生徒も  
先生も保護者も必死だ。

高等部に今春進級した息子  
は、直後のホームルームで担任  
から「3年後には社会人にな  
る。そのために努力しろ」と言  
われた。週の大半は農業、手工  
芸、内装、介護技術など、本人  
の特性に合わせた作業学習に取  
り組む。「できました。確認し  
て下さい」「分かりません。も  
う一度教えて下さい」と声出し  
練習から始まり、私語はなく進  
んでいく。作品の完成度は高  
く、秋の文化祭で販売する等地  
域の方に大人気だ。

にゅうすほっくす No.3

障がい者と世間 これていいの

中学生 寺村 夏連 (東京都 13)

「率先して障がい者雇用を進め  
るべき政党で、法的義務を満たす  
ことができているのは誠に申し  
訳ない」。インターネットのニュ  
ース記事で、ある政党の政治家は  
こう言っていた。  
確かに間違いではないが、障がい  
者雇用というものは「法的義務」  
であるだけで、それ以上は何  
も無いのだろうか。  
私には障がいのある兄がいるた

め、小さい頃から障がい者福祉の  
ことに対してはよく考えてきた。  
そこで最近、この報道を見かけ、  
彼らのことを国は何だと思っている  
のだろう、と疑問を抱いた。  
また、インターネット上では、  
若者の間で「ガイジ」という心無  
い言葉が当たり前のように使われ  
ている。障がい者を一概に貶し、  
彼らを認めるということをしよ  
うとは思わない。  
こんな世の中を許していいのだ  
らうか?

2018年 秋号

10/5 朝